

様式第2号（第8条関係）

平成30年12月3日

白老町議会
議長 山本 浩平 様

白老町議会議員 氏 家 裕 治 印

派 遣 成 果 報 告 書

日 時 (期 間)	自 平成30年11月 5日 (月) 至 平成30年11月 8日 (木) 3泊4日
目 的 地	大分県竹田市、豊後高田市
調 査 事 項	将来を見据えた観光振興の取り組みについて
視 察 の 成 果 (具体的に)	別紙のとおり報告いたします。

※ 必要の都度、写真その他を付加して、研修効果が現れる工夫をする。

白老町議会（産業厚生常任委員会）道外視察に参加して

氏 家 裕 治

期 間 平成30年11月5日（月）～11月8日（木）
目 的 所管事務調査（先進地視察）

「将来を見据えた観光振興」の取り組みについて

視 察 先 ①大分県竹田市長の講話「温泉利活用とまちづくり」
②大分県竹田市「竹田市都市再生まちづくり基本計画について」
③大分県竹田市「故郷愛で地元の活性化に挑戦する若者たち」
④大分県高田市「豊後高田市観光まちづくり会社について」

意 見

① 大分県竹田市長の講話「温泉利活用とまちづくり」

戦後の経済成長の陰で過疎地域として低迷を続けていた直入町を舞台に、「日本屈指の炭酸泉」が湧出されることを生かして、その先進地であるドイツに学び、またドイツとの国際交流を軸にしながら様々なイベントを開催するとともに、個性あふれる公衆浴場など施設整備を展開することにより、観光地としての長湯温泉の急成長を導いてきた。人口2900人の寒村は、この15年間で大きく変貌し「長湯温泉」のイメージが向上するとともに、交流人口は20万人から70万人へと大きく増大している。

首藤市長のまちづくりについての理念に迷いはなく、地域資源である温泉の利活用による町おこしビジョンに迷いはない。目標がなければチャンスが見えない、ビジョンがなければ決断できないとの市長の言葉には強い信念が感じられた。しかし、市長一人では何もできなかつたらう、それを支える市民・行政職員が核となるからビジョンが形になる。強い信念と変わらぬ目標ビジョンが、人を引き付け様々な縁を結び、まちづくりの成功例につながっているように感じられた。リーダーとは、挑戦者たれ、成功体験のない町は寂しい、未来に夢を託す一人ひとりでありたいと強く感じたところである。

② 大分県竹田市「竹田市都市再生まちづくり基本計画について」

竹田市では、中心市街地のまちづくりの方向として、平成21年度に城下町に計画される都市計画道路の拡幅見直しを提起、旧来の400年の歴史を有する「城下町の町割り」を残したまちづくりへと転換した。こうした方向付けを含め、平成22

年度に「竹田市新世ビジョン」を策定、この中で「竹田市エコミュージアム構想」を掲げ、中心市街地においては、「城下町再生プロジェクト」をその施策の大きな柱として立ち上げた。

「城下町再生プロジェクト」は、平成24年度に構想から実践へと大きく舵を切り、城下町交流プラザや新図書館の用地先行取得を皮切りに着手した。同時期7.12災害で竹田文化会館が被災、文化会館の復興建設と合わせ、中心市街地・城下町再生に向け、時代は大きく動き始めた。このため竹田市では、10年後のあるべき城下町の将来像を描く「都市再生まちづくり基本計画」を策定し、市の将来ビジョンとして示すこととした。現在、中心市街地には新図書館が竣工し、城下町交流プラザと歴史文化交流センターの着工を間近にしている。また、周辺には、災害復興のシンボルとなる総合文化ホールが完成している。こうした事業は、この「まちづくり基本計画」に沿って将来のあるべき城下町の姿を見据え取り組んでいるものである。

こうした策定に至るまでの背景の中で特出すべき点は、「住民」・「行政」ともに、道路完成後の将来ビジョンがないままに進められてきた都市計画道路の見直しである。この事業に係わってきた住民・行政・企業からの大きな反対もあつたのではないかと推測するところではあるが、この長い時間の中で、都市計画道路事業を契機とした将来のまちづくりへの機運は見られず、例え道路建設が進んだとしても、中心市街地の衰退は避けられないとの考えからの計画見直し。「城下町竹田」としての中心市街地の潜在能力の活性化に向けた計画に舵を切ったところに将来を見据えた市長の変わらぬビジョンが見て取れたと感じている。白老町に置き換えて考えてみても、地域の特異性・資源の掘り起こし・文化伝承など町の将来ビジョンを明確にしたうえで計画が必要である。

③ 大分県竹田市「故郷愛で地元の活性化に挑戦する若者たち」

竹田市駅前にある「陽はまたのぼる竹田本店」、竹田市産の食材をメインに10種類ものもつ鍋が楽しめる。一つ一つのダシ、食材、メにまでこだわり、地元の久住豚・明水豆腐・契約農家からの野菜の仕入れにこだわって営業をしている。

一人立つ青年の力、人口減少・少子高齢化が進む地元の姿を目の当たりにしたときに突き動かされるかのように始まった商売。若者が東京に行って一旗揚げの的な考えではなく、自分が生まれ育った町や愛した町を誇りに想い、その街で夢見る若者にもっとスポットがあたり、地方で働くことに誇りを持てる若者の創出に取り組んでいる。地方だからできる商品提供までの物語（地方の良さを知ってもらう活動）を、熱く語る店主に若者が刺激を受けて現在、4店舗の運営を展開している。

地方だからできることに目を向け新たな起業に向けた若者同士の議論の場がもっと必要であると考えます。

④ 大分県高田市「豊後高田市観光まちづくり会社について」

豊後高田市の中心商店街は、江戸時代から昭和30年代にかけて国東半島で一番栄

えた町であった。しかしながら、時代の波に取り残され寂しい町となってしまった。

そこで、商店街が元気だった最期の時代、昭和 30 年代の活気を蘇らせようと平成 13 年に「昭和のまち」を立ち上げ、当初 7 店舗からスタートしたまちは、現在 40 店舗ほどになってきている。げんざいは、昭和レトロブームもあり年間 40 万人の来訪者を迎える商店街となっている。

平成 17 年に「豊後高田市観光まちづくり株式会社」を設立。観光拠点施設である昭和ロマン蔵の運営や昭和のまち商店街の案内を通じて「昭和のまち」の交流人口を増加させる施策を推進、また周辺地域との連携により、商業と観光の一体化した振興を図っている。

代表者は市長、運営の実行部隊は市職員が担っており年間 91 億円の経済効果を生んでいる。こうした財源を基に移住促進事業として無料の市営塾や移住希望者のインターシップ支援事業など市独自の支援策を実施。高校生までの医療費無料化、小中学校の給食費の無料化など子育て支援が拡充している。

* 住みたい田舎ランキング 6 年連続ベスト 3 入り